

メディアとスポーツの関係性と メディアの影響力について

マスコミュニケーションゼミナール 1215079 定國 翼

1. 研究動機・研究目的

21世紀のスポーツ文化を展望する上で、メディア・スポーツの存在はもはや看過できない状態になっている。スポーツがメディアと密接になった理由や、メディアがスポーツに与える影響力について調査したいと考えた。本稿では歴史、資料などからメディアとスポーツの関係性を研究し、メディアがスポーツに与える影響力を調査していきたい。また、メディアで報道することで選手や競技にどのような影響を与えているのか研究していきたい。

メディアが与える影響力をアンケートの結果から出された認知度を用いて明らかにし、現在のメディアの影響力を調査する。

2. 研究方法

本研究ではメディアの影響力を調査するため、媒体として信頼性が高い新聞を調査対象とした。スポーツ選手の認知度と、新聞の掲載数が比例するののかについて調査を行った。調査対象として、本校のラグビー部、サッカー部、野球部、フットサル部のそれぞれ各10名、合計40名にスポーツ選手の認知度におけるアンケートを実施し、それぞれの部活や競技における関係性を求めていく。また、専門競技を行っている学生とそうでない学生とで認知度に差が出るかについても調査を行った。

3. 主な結果と考察

スポーツ選手の認知度と、新聞の掲載数が比例するかについては、比例すると言うことができる結果となった。サッカー、野球、ラグビーの三つとも、認知度が高い選手ほど新聞の掲載数も多いことが分かった。新聞記事の件数については、競技のレギュレーションが大きく関係している。プロ野球は2017-2018シーズン（レギュラーシーズン）で306試合行われるのに対して、ラグビートップリーグ2017-2018シーズンで107試合行われた。このことから試合数に応じて各スポーツの新聞記事の数に差が出ることは明らかである。

各部活の認知度の差を調査すると、競技ごとに異なる結果となった。

サッカーは全体的にみてもある程度相関があるといえる。つまり、認知度にあまり大きな差はないという結果になった。理由として、サッカーは日常的にテレビや新聞などのメディアに取り上げられているため、認知度に差が付きにくいと考えられる。

野球は相関にばらつきがある結果となった。理由としては有名選手の人数が多いことが挙げられる。Jリーガーで年棒が1億円を超える選手は2018シーズン開幕当初は15名だ

ったのに対し、NPBには2018シーズンで年棒1億円超えの選手が116名であった。このことからわかるようにスター選手が多くいることによって票数も分散されるため、相関もばらついたと考えられる。

ラグビーは非常に高い相関があり、どの部活においても認知度に差はないということが分かる。理由として、今回40名にアンケートを取り、5名全員答えることができると考えた場合200票集まるが、ラグビー選手で得た回答数は72票だった。しかもこのうちの31票はラグビー部の回答であるため、サッカー部、野球部、フットサル部の学生は平均すると、一人当たり1.3人しかラグビー選手を知らないことになる。このことからわかるように、ラグビーは近年注目が高まっているものの、まだまだ選手の名前を認知される段階には至っておらず、超有名選手のみ知っている可能性が高い。よって認知度に差が生まれないとはいえる。

4. 結論

本研究から、メディアはしっかりと影響をあたえていることが確認できた。新聞記事の件数と本学生の認知度は比例しており、新聞記事が多い選手ほど認識されているという結果になった。また、1つの記事に何度その選手の名前が記載されているのかの平均値は、ラグビーでは平均記載回数が多い選手が上位にランクインしているといえるが、サッカーと野球においてはあまり当てはまらなかったため、平均記載件数と認知度はあまり関係しないと考えられる。部活ごとの認知度の差の調査では各スポーツの特性が見受けられた。サッカーは日本で、好きなスポーツランキング第2位（中央調査社2018）に入ることからもわかるように、非常に人気が高く、日常的にメディアに取り上げられていることから部活動に関係なく、有名な選手の認知度に大きな差はなかったといえる。

野球は他の競技と比較した際、有名選手が多くいるため票にバラつきがあり、あまり認知度が一致しなかったといえる。ラグビーはどの部活も認知度に差がなかった。理由としては、2019年のラグビーワールドカップを控え、メディアに取り上げられることがおおくなったラグビーだが、選手の名前を認識するところまでは至っておらず、超有名な選手しか認知されてないといえる。しかし、ダン・カーターが3位に入ったことから、ラグビーがメディアで取り上げられる件数が増えていることも確かである。

5. 卒業論文の執筆を終えて

本論文の執筆にあたり、多くのアドバイスやご指導を頂いた神原直幸先生には心より感謝致します。神原直幸先生には、普段のゼミナール活動や就職活動においても、丁寧なご指導を賜りました。自分自身の力不足でご迷惑をおかけしましたが、神原直幸先生のおかげで充実した学生生活を送ることができました。本論文の執筆経験、ゼミナール活動や、部活動など、4年間の大学生活で学んだことを糧に、今後も精進していきたく思います。

